

令和 6 年度 東京藝術大学 未来創造継承センター 芸術資源活用プロジェクト 実績報告書

※Word ファイルで提出してください。

プロジェクトの タイトル	「日本のパイプオルガン演奏の先駆者・眞篠俊雄」の楽譜コレクション ～演奏プロジェクト～	
実施責任者 (申請代表者)	氏名	所属／学年／役職 (所属がない方は未記入)
	千田寧子	オルガン研究室・教育研究助手
実施期間	2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日	
実施内容	<p>大正から昭和初期にかけて、東京音楽学校のオルガン演奏を牽引し、東京音楽学校にパイプオルガンが導入された際にオルガン教授の立場であった眞篠俊雄。彼はたくさんのおルガン楽譜を所蔵していた。そこにはベルリン留学時に入手したものが多く含まれると考えられる。その楽譜がどのような響きを映すものなのかを探るべく、その中から数曲をゆかりの楽器で実際に演奏した。この楽譜群には当時のベルリンにおけるオルガン音楽の最先端からスタンダードまで、幅広くコレクションされたとみられ、その後の日本での教育活動に影響し演奏レパートリーとなっていったものと、レパートリーとしては定着しなかったものがあるが、いずれも時代感を反映したものとなっている。</p> <p>演奏に使用した旧東京音楽学校奏楽堂のアボット・スミス社製パイプオルガンは、徳川頼貞侯が 1920 (大正 9) 年に自身の音楽ホール「南葵音楽堂」に設置したが、1923 (大正 12) 年の関東大震災によってホールが壊れ使用できなくなっていたものを、1928 (昭和 3) 年に東京音楽学校へ寄贈したものである。以後東京音楽学校のオルガン演奏はこのパイプオルガンを中心に行われ、眞篠俊雄も皇后陛下行啓御前演奏などで、このパイプオルガンを演奏している。</p>	
実績報告	<p>2025 年 1 月 31 日 (金) 東京音楽学校旧奏楽堂にて、パイプオルガンことはじめ「日本のパイプオルガン演奏の先駆者・眞篠俊雄」楽譜コレクション～演奏プロジェクト～ を開催し、いずれもパイプオルガンのソロで、Moriz Brosig : Fantasie Nr. 1 Op. 53、Mario Enrico Bossi : Thème et Variations Op. 115、Alexandre Guilmant : Seconde Sonate Op. 50、Richard Bartmuß : Zehn Charakterstücke für Orgel Op. 37-7, 9, 10、Friedrich Gernsheim : Fantasie und Fuge Op. 76 を演奏した。選曲にあたっては、眞篠俊雄の所蔵楽譜の整理を通じて、カテゴリーを形成するグループを見つけ出し、それを象徴する作品を抽出することに努めた。それらを「演奏して」披露することに重点を置き、演奏作品として捉えた時の魅力を伝えるべく、解説をプログラムノートに添えたうえで、演奏者としてそれをどう感じているかということと作品の前後に紹介した。聴衆の方々にアンケートを行ったところ、それは概ね興味を持って感じていただけ、新鮮なものとして映ったようである。今回のこの試みが、眞篠コレクションの存在意義、演奏意義、その面白さをお伝えする有効な手段であることが確認できた。</p>	

※本様式に加え、補足資料として PDF ファイルや音声データ、映像データ等の提出も可。(必須ではありません)